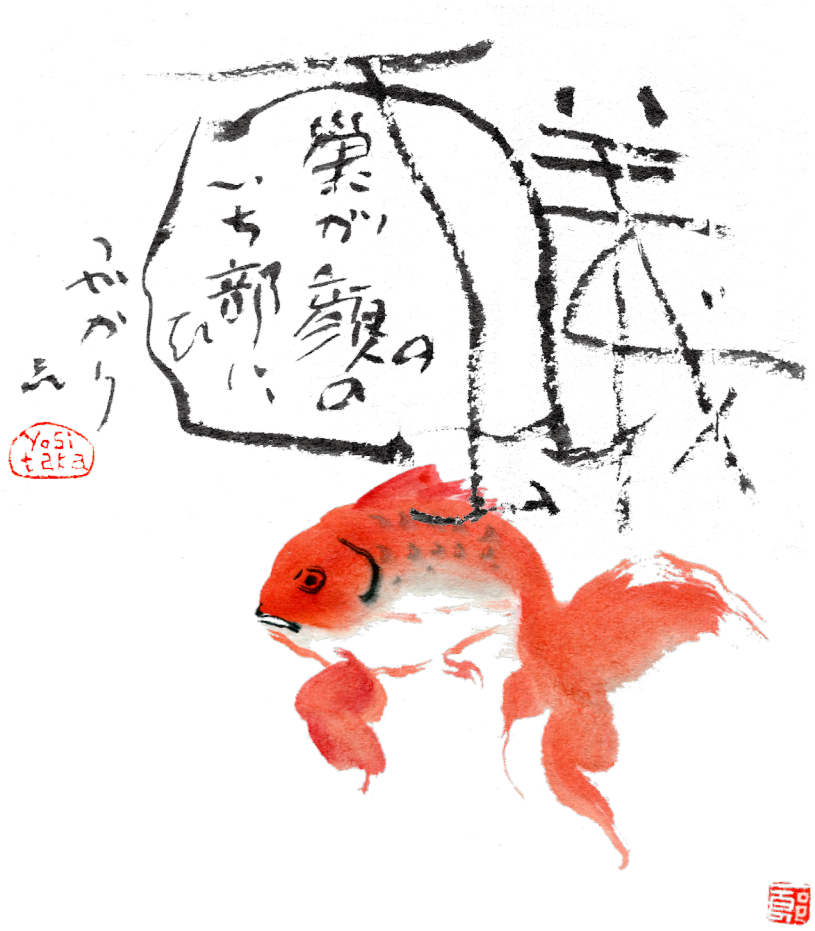
あさ 5

2012

立浪草

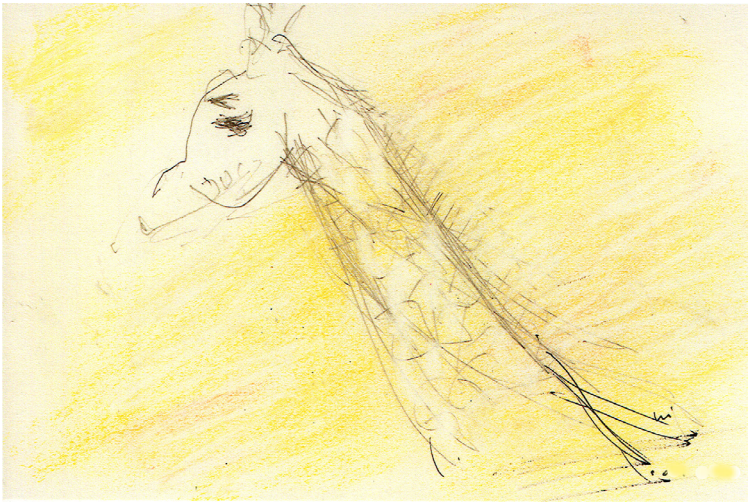


蟻の巣が顔の一部にひっかかり　　喜孝

金魚　　一郎

あと

五　月



春燈

佐藤喜孝

この熟柿これよりさきは形而上
ローバイや廣島福島片假名に
あたたかしあかごにアインシュタインのべろ
入汐はさびしきものと鳥雲に
花の鳥くちなはは地にのこりたる
箸立がまん中にある春燈
絶入したことの小文梅遲し

カラオケといふものを体験する以前は宴会など手拍子で唄ってゐた。初めてカラオケに出会ったのは『暖流』の先輩に連れて行って頂いた六本木の飲屋である。正しくはバーとかスナックといふのだらう。お通しにお菓子のチョコレートが出てきてびっくりした。まだ8（エイト）トラックのテープを使ってゐた。その次のカラオケの思ひ出といへば中野坂上の『公園のベンチ』。高島茂がボルガの仕事を終へこのスナックから電話が掛ってくる。寝入端ではあるがいそいそと出かける。いつもみな同じ歌ばかり唄ふ。誰かが唄ってゐる間も俳句の話をしてゐる。八田木枯さんともよく此処で呑み唄った。古い歌の世界の戻り、時を忘れた。私のカラオケは俳句といつも一緒だった。

吾が行方

堀内一郎

運命は運命を呼び日脚のぶ
さくら餅皮ごと食うべ失語症
年とるは良きことならず万愚節
浅草へ行く話その気に春来たる
沈丁花わが家訪ねず帰りきし
屋上の人が綺麗に桜咲く
遠目にも桜またたき吾が行方

少年

森理和

少年が少女を詠ひ春の星
時ここに白雲に化し墓の梅
春きざすふはり流るる人となり
啓蟄のやつぱり内へガラス拭く
リズム打つ春のあられのころり跳ね
囀や剪定の枝生々し
春の雲旋回つづく鳩の群

去年私にとって最高の年であった。

森理和さんの計らいでハーモニカを吹くチャンスを与えられたこと、句集「畳」が佐藤喜孝さん手作りで出版ができたことも改めて両氏に厚く感謝申上げます。今年に入って二月頃から、気力が無く俳句もままならず、ハーモニカも吹けない。

病院で脳腫瘍と解った。

良い事の後は悪いことの通理で、リラックスのためにも毎日少しづつ飲んでいる。

「かまつか」の先輩の句に

生きられるだけは生きよう薔薇は真赤
成田凡十

お彼岸に三ヶ所の墓所を訪ねました。待ちに待った春でしたので梅・桃・山茱萸ととりどりに咲き誇り、どのお寺さんも正に桃源郷とはこの地の事だろうと納得しました。

平成七年に墓所を造り替えた折に小さな白梅を墓石の手前に植栽しました。毎年、五・六粒でしたが大きな実を付けていました。六〇センチほどの高さに枝を整えて、夥しい貝殻虫の退治も合わせて墓のお掃除です。今年のお彼岸まで家の者はこの梅の花を見る事はありませんでした。

遅い春の訪れが梅の開花も遅らせて、初めて花とご対面しました。球形に純白の花が蕾の一つも残すことなく一斉に開いていました。遠目には何が置いてあるのかと思った程でした。予期せぬ贈物に感謝頻りです。

◈

山荘慶子

冬晴や一片の雲見てをりぬ

摂理とふことば過れり水仙花

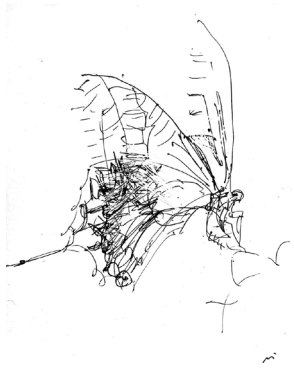
椪柑はマーマレードに朝の卓

咲き遅る花桃祭雨の降る

育ちよし悪しきも交り花菜畑

二人分薬仕分けり花辛夷

人波に匍匐する犬春祭



◈

吉弘恭子

粉雪や化石にならむと寝落つかな

霜柱九竅にひびく音すこし

たゆたふて春の牡丹雪おちまじく

あるくほど六腑をあらふ春の風

春の雨うしろに母がゐてまねく

蹋まる芽吹きの白をまなうらに

奔湍にまかす枯葉と雪客と

朝日新聞の投稿欄にこんな記事を見付けた。前略・中略住み馴れた実家を就職を機会に独り立ちして出て行く時に「人には迷惑をかけちゃいけないよね。迷惑をかけていいのは親だけだよね。」と。この意見には賛否いろいろな意見があると思うが、最後の一言に反応し、不覚にも目頭があつくなってしまった。この年になると親が居ないのが大半だが、一五歳で母を亡くしてしまった私には「もっともっと心配させてあげたかったなあと」この度の事故で世界中に迷惑をかけたという自覚のない日本、原発廃止は仕事がなくなるし補助金ももらえなくなるしと洩していた地元の人の意見。直接被害にあっていないので意見を述べることはおこがましいが、選挙権を得た時からの信念は自分の口から言えるまで貫きたいと改めて思っている。

集ひ

赤座典子

振付けは友「いい日旅立ち」暖かし
嫋やかに乱れず舞へり春の宵
つくしんぼ泣く子踊る子わらわらと
褒められて犒はれて友さくらもち
つれあひの良さそれぞれに春燈
ものの芽のほぐるる気配わかちあふ
手話をもて「また逢う日まで」春の月

歌詞のイメージを手話で表しリズムの楽しさも合わせて踊るもの。聴覚障害者が見て踊って楽しめるようにと創られた。NPO法人「YOU&I」は手話ダンスを通してあらゆる障害者も一緒に楽しみ、共に生きる喜びを持つことを目的とする団体で、友人は十三年前から加入し全国各地へボランティアで訪問している。

手話ダンス:瑠璃色の地球

今年三月のチャリティーイベントより　赤座吉保撮影

お彼岸

遠藤実

口下手も彼岸詣りは長長と
父母と会ふまぶたの中の彼岸かな
長生は仕事となりて春の泥
春なのに背丈の縮む妻がゐて
蕗味噌や倖せさうな妻の愚痴
朧月陸に藻屑の舟が浮き
次の世も付き合ふ人か彼岸晴

桜の木の皮の細工物は、日本だけのものと話を聞いたことがある。磨き上げたる桜の皮の美しさは、まことに風雅に富み日本らしさを出していると思う。

さて桜の花の季節に見る桜の樹は若木ほど木肌はきれいで勢いがあるように見えるが、古木の大樹は枝振りは良く、貫禄は有り威厳さえもっている。花は色艶、数まことに見事である。花見の場所取りの人も真っ先に大樹の下を取る。しかし良く見ると古木の幹は黒くくすみ痛々しいほどの色肌をしている。いかにも苦労しましたという幹である。その幹を隠すかのように今年も満開の花を咲かせ人々を喜ばせている。

セロリ

大日向幸江

音立ててセロリ一本たひらげぬ
トランプのキングと遊ぶ春炬燵
魚籠の中数多の白魚寄り目して
ホームレスの凭るる大樹囀れる
三月の雲に誘はれ一万歩
ヴィーナスも私の耳も春の貝
きらきらと初蝶舞ふや洗車中

行きつけの八百屋さんの店先に〝セロリ〟が曇り空の下オーラを発している。私とセロリの目がぱっちりと合い、一株丸ごと買ってきました。帰る道々スマップの〝セロリ〟の曲が響いている。まず昼食に丸ごと一本マヨネーズで食べる。その後太いセロリを三本糠味噌にする。その夜はじゃがいものサラダにセロリを二本使い、美味しく食べる。残りはまた朝の楽しみに今日はこれで美味しくできたポテトサラダと共に冷蔵庫に。セロリの一夜漬もいい具合の味、残りのセロリを野菜スープに使う。もちろん葉も丸ごとスープになる。玄米のご飯と、野菜スープ、一夜漬、セロリづくしの朝ごはん。身体がセロリの香りできっと虫が寄ってきそう。ある水曜日の出来事でした。

東日本大震災一周忌

木村茂登子

あの日のことなかつたやうな春の海
黙祷のまなうらにありあり春の海
三陸に摘みし若布をいただきぬ
春ショール纏ふラベンダーの香を纏ふ
春雪や話せば長くなる電話
春の雪昨夜は雨の音に寝て
待ちわびる春の女神の絹擦れを

三月十一日　曹洞宗大本山總持寺大祖堂での「東日本大震災法要」に報恩婦人会の一員として参列した。

貫首江川辰三猊下の「慰霊法要」
太鼓奉納（大倉流）
轟太鼓（和太鼓集団）
鼓奉納（百三十二名）
花芸奉納（草月流）
聲明　観音十大願文　修行僧
能楽「石橋」より獅子の舞
（金剛流狻猊之式）
講和「平成の救世観音」山折哲夫
宗教学者
二時四十六分黙祷

千畳敷の大祖堂を埋めつくす人々とまさに一期一会の交流であった。

三　月

篠田純子

胃カメラの通りし痛み風信子
早婚の娘を想ふひひなの夜
啓蟄や享年までは生き抜くか
剃髪に漆の頭襟（ときん）春の山
退職の人を真中に遠足す
法螺貝と音上ひびき山笑ふ
カップ麺曇った窓と春の雪

三月二十日、菩提寺である向島の弘福寺の彼岸会の法要に参列した。「黄檗宗」という珍しい宗派である。春には土手いっぱいに桜が咲き墓に飛花が訪れ、夜は屋形船の灯が行き交い、遠近の料亭より三味の音も聞かれようとの立地の寺である。何やら墓に入るのが楽しみになってくる。

法要の前に観世流の角当行雄、直隆氏による仕舞が本堂にて演じられた。面を付け紅葉狩、隅田川、羽衣を舞われた。特に隅田川は「名にし負はばいざ言問はん都鳥…」とはじまり舟人に我がこの死を知らされるところまでだが、此の度の震災、津波で子を亡くした母親の悲しみ苦しみと重なり見入ってしまった。直隆氏の話では能には鎮魂の意味も有するとのこと。津波で亡くなった小さな命を思った。

桜　餅

芝宮須磨子

声がしてそつとおかれた桜餅
雪晴や隣家の娘母となる
歩幅だけ雪掻きをへて良しとする
いぬふぐり母の好みし濃紫
木蓮の咲き初む路地のたたずまひ
弥生尽子らの進路の定りて
いつの日も小花でありしいぬふぐり

じんろく

定梶じよう

まつさきに豚舎の庇雪解して

震度五はあったと思ふ麦を踏む

強東風へひとの出棺かたげるな

先生がゆび指しいぬのふぐり咲く

灯のともる窓から順に東風たたく

じんろくの名がつき子猫愛さるる

恋雀軒の波付トタンかな

『文語』には二つの意味があり、話し言葉に対する書き言葉の意で使う時と口語文に対し学校で教える平安時代の言葉遣いを意味する場合がある。古い音声は残っていないわけだから、むかしもいまも『文語』とは書き言葉の意である。で、言葉は経年変化するものだが、その中で歌人は比較的まじめに『文語』に則り歌を作っていた。それでも、中世の『文語』近世近代の『文語』、というように変ってゆく。俳諧の方は口語の影響をよりうけて少し違っていたかもしれないが、しかし芭蕉や蕪村たちは、純粋な『文語』を使って遣っているとは思っていなかったろうが、と言って近世の『文語』を駆使して云々、という意識はなかったろう。

本来『文語』とはそういう意味だ。

◈

須賀敏子

天空へゴンドラ向ふ春スキー

膝を折りマクロレンズに犬ふぐり

落椿少し流れて沈みけり

枝垂梅黒板塀の華やぎて

待ちきれず三分の花もよしとする

客送り春三日月を見上げたり

春遅し一人でゆける処まで

三鷹の森ジブリ美術館は、ＪＲ三鷹駅より歩いて十五分程で着く。入場券は予約制で、二時間おきに入場するが入替え制ではない。建物は広くはないが、階段を多用して迷路の様になっている。順路は全く自由である。ジブリアニメのファンなら大人でも十分楽しめる空間である。ジブリと言えば宮崎駿監督との楽しい出会いがあった。二〇〇七年八月、最後の百名山「光岳」登山の前日南信州の上村下栗の小さな宿に泊った。客は私達四名と宮崎駿夫妻のみであった。同じ所沢市民ということもあり挨拶をすると気軽に応じて下さり話が弾んだ。百名山完全登頂と共に宮崎駿夫妻にお会いした事は忘れられない思い出になった。

啓蟄

田中藤穂

気掛りなこと一つあり目刺焼く
語らひし面ありありと春炬燵
啓蟄や黄色に変へるカーデガン
土俵入よいしょよいしょと春を呼ぶ
凜凜と選手宣誓春光裡
早咲きの桜に触るる陣屋跡
海の音外人墓地はリラ盛り

いつか主人に「何の花が好き」ときいたら「撫子」と言った。娘のお姑様は「れんげ草」と言われた。それぞれ強い思い出があるようだ。

私は、と聞かれたら何と答えようか、沢山あって中中一つに絞りにくい。私はエリカとかミモザのような小さい花が集って咲く花が好き。でも芍薬も好き。酔芙蓉も好き。時々人に尋ねると額紫陽花という方もある。薔薇という方も。花は匂いのあるものにひかれるが木犀は少し強すぎる。泰山木も部屋に活けると鼻が痛くなる。姉は雪の下、義兄は何てったって桜だと言っていたが、二人共もう遠いところへ行ってしまった。

姉の家から貰った雪の下と酔芙蓉は、毎年わが家の庭を彩っている。

竹内弘子

氏神の手水の側の白椿
けさの冬蛇口から水迸る
鼻風邪が治らぬといふ子の電話
去年の月境の塀を猫あるく
多感なる子の加はりし歌留多とり
木目なき天井ゆらぐ桃の花
木の芽障りの饒舌とおもひける

叔母の運動会

季節の変り目に、障子を張り替えたり大掃除をする時、傍で細々と指図をする母と叔母が、疎開先の隠居所にいっている離れ家をきれいに使えと言っているのだ。お風呂だけは順番に母屋にもらいに行くのだった。

女性が多かったので歌留多とりは賑やかだった。昨年他界した叔母が美声の持主で読手と決っていた。97歳の秋、街の運動会で挨拶に立って拍手が鳴りやまなかったという。先日従姉妹と地下鉄で運動会の叔母の話になり、やはりおかしくてならなかった。従姉妹の家族の上に何よりの果報をもたらすものだと思った。よく通る声で漢語まじりの長広舌を揮っている叔母を思い出すと元気が出る気がする。

春の音

長崎桂子

田や畦に春の氷や忍び足

音信のなき友の夢余寒かな

余寒なほ縁者の惚けゆくを目に

宙冴えて燃ゆる入日や二月盡

同じ刻初花捜すニット帽

大雨の明けてせせらぎ春の音

みちのくの木樹はいかにか百千鳥

毎月の中部電力の検針票と冊子には、節電の文字が目を引く。それ故に、毎日の生活に細かく心がけているが、暮には早早と吹雪く日があり翌朝の積雪が度々。今年の一月、二月の寒さは、ここ数年の間には感じた事のない冷え込む日々で、少しでもと、コンセントを抜いたり部屋の温度は一度か二度、去年より低くしている。

検診日に、その紙面の数字を見て使用量が、前回より少なかったと、うれしくて、よかったと満足します。

牡丹

早崎泰江

逝きし人天高くあり白もくれん

さくら咲いてマイナス思考ふき飛ばせ

春寒し迷ひの多き旅支度

診療所人まばらなり春の朝

牡丹や今年も花芽二つ三つ

三十年余り前、母を連れ家族と共に須賀川の牡丹園を訪れたことを思い出す。見事な牡丹園であった。感激した母は私達に小さな二株の牡丹を買ってくれた。ピンクと紅の二種類で、やがて毎年大きな美しい花を楽しませてくれるようになった。残念ながらピンクの方は数年前、遂に枯れ果てたけれど紅色は今以って細々ながら花芽を二つ三つつけている。

前月抄

花の影ゐるべき人のゑみを置く　佐藤喜孝

麦の芽に乾きし畑のうるほへり　早崎泰江

夢探すルーペが一つ二月雪　堀内一郎

おにぎりの思はぬ温み梅かをる　森理和

湯気上がる屋台の上に豚の顔　吉成美代子

蒼き空ぽつとういたる冬ざくら　吉弘恭子

白絹の煌めき持ちて寒牡丹　赤座典子

見得を切る役者の目力春一番　遠藤実

ゴムホース溢れ出る水チューリップ　大日向幸江

とろとろと陽は雲の中二月かな　木村茂登子

歌舞伎座のずずんと伸びる春の風　篠田純子

漁火寒しつひの住処のともるごと　定梶じょう

風花と奥につたへる夕まぐれ　芝宮須磨子

スキップやただ白梅の咲いただけ　須賀敏子

鼬ゐし頃の東京下駄の音　田中藤穂

水仙や窓に園児の笑み並ぶ　長崎桂子

歳月に欠けし狛犬春の雪　田中藤穂

やまぶきの穂絮春日にむきなほる　吉弘恭子

喜孝抄

四月作品より

佐藤喜孝

麦の芽に乾きし畑のうるほへり　早崎泰江

冬の乾燥し寒々とした畑に麦の芽をみつける。瑞瑞しい麦の芽に乾燥した畑も潤って見える。常日頃観察されていただく褒美であらう。土地への愛着も伺へる一句でした。

夢探すルーペが一つ二月雪　堀内一郎

ルーペは拡大鏡・虫眼鏡とも云ふ。老眼が進み視力の衰へをカバーし新聞を読む時などに使ふ時は拡大鏡か虫眼鏡の語彙が似合ふ。しかし夢を探すとなれば拡大鏡は相応しくない。直接夢を探しているルーペと読んでもよいし、昆虫の新種を探しているルーペと読んでもよい。私は前者が好もしい。しかし掲句の「夢探しルーペ」は「一つ」と云ふ措辞により実際には使っていないやうに読める。置かれてゐるのか、抽斗に仕舞はれてしまったのか。胸の中にあるのだらうか。東京は二月が一番雪が積り寒いやうな気がする。

白絹の煌めき持ちて寒牡丹　赤座典子

作者の比喩俳句は的確であり記憶に残る句が多い。

紅梅を牛皮のごとく雪くるむ
待つほどに白蝶貝の後の月
縁取の追羽根めける姫椿
秋高しプラモデルめくエッフェル塔
花あせび磨硝子めく硬き音

掲句は寒牡丹の花瓣を白絹に喩へてゐる。白絹は絖であらうか、絹の高貴な耀きを彷彿とさせる。寒牡丹もさぞや満足なことであらう。今月は他にも

西行堂狛犬に乗る日陰雪
得仁堂雪解雫の細細と

など対象を正面から捉へ滋味有る句にしてゐる。

見得を切る役者の目力春一番　遠藤実

構成の面白い作品。「目力」がこの句を生かしてゐる。春一番に向って見得を切っているやうで愉快。しかしこの句は推敲の余地がある。見得は切るもの、見栄は張るものと決ってゐる。また見得を切るのは役者である。この辺り整理推敲して一段と粋な句にしてみたい。と鑑賞者は思った。心をつたへる俳句は、時には表現技術が邪魔する時がありますが、掲句は表現力が重要な句です。

漁火寒しつひの住処のともるごと　定梶じょう

「広辞苑」に拠れば「終の住処」は「終生住んでいるべきところ。また最後にすむ所。死後に落着くところ。」全訳古語辞典では「終生住んでいるべきところ。」はなくあとは同じである「死後に落着くところ」と云ふ意味もあるとはじめて知った。終の住処を意識するのはどのやうな時であらうか。あれが漁火といふ記憶はないがどこかで私も見てゐるはずだとネットで探してみた。水平線に並ぶ幻想的な写真が多かった。心に沁み入る句である。言葉をさし挟めない句である。

観世音みんな白息もて拝す

真実信仰の対象になってゐる観音様、対象にしてゐる人々。といふ寒気の中の熱気が伝はる。〝みんな〟といふ云ひやうが白息の人との親近感を抱かせる。

スキップやただ白梅の咲いただけ　須賀敏子

〝ただ白梅の咲いただけ〟なのに、心がはずみスキップをしたくなる心境になったのでしょう。作者自身も些細なことだと断ってゐる。時が来れば梅の花は咲く。必然の事柄ではあるが、必然のことが当り前のやうに訪れたことを大切なことだと喜んでゐ

るのです。「スキップや」といふ切出し驚いた。大胆、そして鮮度がある。

歳月に欠けし狛犬春の雪　　田中藤穂

今月は特作が二編、頼もしいことです。吟行句は見聞した、感じた反響が素直に出ていて楽しめる。

藤穂さんの特作は全体に表現を急がずゆったりとしたベテランの味を楽しめる。〝歳月に欠けし〟に智の働きをみるが角は立ってゐない。

芽吹き待つもののいろいろ鴨の声

春未だしといふ水辺の光景。芽吹きを待つのは草木だけではない。今は静かに鴨の声だけが聞こえる。次の瞬間には水辺は木の芽草の芽で溢れる様になるのである。それを待つ作者である。

雪吊のいつぽんあそぶ春の風　　吉弘恭子

これは智の働きが見えるがこれはこれで楽しい。「雪吊りのゆるみに春の足音す　藤穂」とならべると両者の作風の違ひがわかる。

ひと声を鴨春空になげかける

外連味のない風景句。しかしここでは「なげかける」と風景句に動きを与へてゐる。

やまぶきの穂絮春日にむきなほる

この句、気になったが〝やまぶきの穂絮〟に自信がなかったので後日に譲ることにした。が「むきなほる」は掴まへたものがあるやうに感じた。

近世俳諧と漢詩文　五十四

王　岩

宗春に関し荘子云、藐姑射山有神人居焉。肌膚若氷雪、綽約若処女。

かほ見せの脂氷らめ鬢かつら　　荘　丹

荘丹、鈴木氏、また高柳氏とも。江戸の人。名は荘蔵・伊良。号は荘丹・雪奴・梅郎・能静など。江戸時代の俳人、医者。享保十七年（一七三二）生、文化十二年（一八一五）二月十四日没。一説に文化十四年没。父親は医者鈴木長兵衛悦である。村上坦庵に医術を、門瑟・蓼太に俳諧を学んだ。和漢の学に通じ、旅を好んだ。五十余歳まで江戸に住し、のち武蔵国与謝に移り、その地で没した。著作には『其角句解』（寛政八刊）、『芭蕉句解参考』（文化三）、『嵐雪発句撮解』（文化三）『能静草』（文化六）などがある。前掲の句は『能静草』に載せてあり、句の前書きは『荘子』から出典したものである。

『荘子』「逍遥遊篇」の中で、肩吾と連叔という二人の有道者の問答を借りて、有名な藐姑射の山の神人の話を語った。

曰。藐姑射山有神人居焉。肌膚若氷雪。綽約若処子。不食五穀。吸風飲露。乗雲気。御飛龍。而遊乎四海之外。其神凝。使物不疵癘而年穀熟。（肩吾曰く、「藐かなる姑射の山に神人の居める有り。肌膚は氷や雪の若く、綽約かなること処子の若し。五穀を食わず、風を吸い露を飲み、雲気に乗り、飛ける龍に御り、而して四海の外に遊ぶ。其の神の凝れば、物を疵つけ癘ましめず、年の穀りを熟ならしむと。」）

福永光司氏は『荘子』内篇（新訂　中国古典選　第7巻）の中で、これを次のように分かりやすく意訳した。

その肌は氷か雪のように真っ白く、その姿は、しなやかな肢体をういういしいなまめかしさに包んだ処女のように清浄無垢であり、風と露とを生命の糧として天地宇宙の間を自由自在に飛翔して回るという姑射山の神人、そしてその柔和な面ざしの底に、いかなる天変地異―漲る濁流が天にとどくほどの洪水にも、金や石が焼けとろけるほどの旱魃にも平然として自己を失わない強靭な生命力をたぎらせ、一たびその精神が凝集すれば、その宇宙的な精神のはたらきが、生きとし生けるものに災禍なく疫病なく飢餓なき生の安らかな歓喜を謳歌させるという神人は、荘子の描く超越者のロマンチックな姿であるとともに、中国民族の思いえがく一つの最も理想的人間像でもあろう。

荘丹は『荘子』における姑射山の神人のイメージを借りて、顔見せに出た歌舞伎の役者の美しい姿を活写しているであろう。

因みに、『万葉集』巻十六に「心をし無可有の郷におきてあらば藐姑射の山を見まく近けん」とあるように、藐姑射山は日本でも古くから精神的理想郷とされてきた。

鈴木荘丹

夏川やはなれぬ鴛の船二艘

華さくら雙岡のおもひかな

うくひすや朝な朝なの布施に何

花なから参らせ篭や莖立菜

紅海は大太刀をさす若衆哉

うぐひすの丁子含める音色哉

水仙や兎の耳も旭影

秋の空心うごかす風も無し

毎月25日発売
定価980円(税込)
月刊 俳句界 2012年6月号
◎巻頭エッセイ 堀切実 赤坂憲雄
◎論考 村上護
◎人と作品～石川桂郎 高橋鏡太郎 他
◎俳人風狂エピソード◎風狂俳人名言集◎現代俳句の"風狂"とは？
岸本尚毅 江里昭彦 出口善子 櫂未知子
風狂の俳人たち
特別作品〈グラビア〉俳句界NOW 大峯あきら 石井いさお 森田峠
現代俳句の開拓者
○世界俳句協会／夏石番矢○季語と歳時記の会／西川遊歩○週刊俳句／西原天気○能役者／安田登 他
▼名句集に名序文あり
エッセイ 上田五千石 澤木欣一 高濱虚子 石田波郷 他
大林宣彦 羽仁進 東直子 他
私の一冊 柏原眠雨 ※セレクション結社「橘」
魅惑の俳人 篠崎圭介
対談 佐高信の甘口でコンニチハ！ クミコ（歌手）
《発表！》第14回 俳句界評論賞
※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

春徒然

佐藤喜孝

引く鶴に携帯電話かけてみる
地獄いや天國も嫌花いかだ
立てて運ぶ假設のトイレ花の雲
さくらちるだれか數へてゐるやうに
とどきける落花を縫ひし鐘の音
風呂敷に花の日本を包みけり

花がすみといふべききいろにスカイツリー
初つばめスカイツリーのけふも伸び
救急車とまる雀の子の鳴いて
夕かげをひろひあつめて花こぶし
清明や兩手に白湯のひとつある
暗闇が固まってゐる春の坂
塔克拉瑪干よりこの霾ふれり
惜春や碇としたる父と母
つばくらめ仁王の利足前にせる
人間は歩けなくなるいぬふぐり

あとがき

扉を私の字だけでは持たないので堀内一郎さんにお願ひして水墨画を貸していただいた。それに私の字を乗せると云ふ、これはこれでまた傍若無人の行為ではありますが。

今月もまた驚かされた。堀内一郎さんの小文を読まれた方も驚かれたと思はれます。絵をあづかりにお伺すると店の入口に顔を出されて待っていてくれました。声が僅かしか出ないのでお話しするのも辛からうと早々に帰ってきました。私の字の不出来はともかく一郎さんの絵とコラボできる事を幸せに思っています。

もう一つは赤座典子さんが大腿骨骨折をなされました。これも魂消ました。しかし電話の声も常と変りはなく、また術後の経過もよいと聞き一安心致しました。詳細はきっとご自身がお書きになられると存じます。

（喜孝）

あを吟行のお知らせ

旧古河庭園入口
六月二十三日（土）十一時
申込は六月十五日までに（予定で可）
吉成美代子　迄ご連絡下さい。

二〇一二年五月号
発行日　五月六日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　6908　6038
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。

あとがき

今年はいつまでも寒く桜の開花が心配されたが、多少の遅速はあれど季節は確実に巡ってきた。去年は田中藤穂邸でお花見をした。少し遅いと心配したが、落花の美しさを十分に味はった。その前の年は……と考へる。お花見には鎌倉喜久恵さんは常連であった。私のあまりの悪筆をたしなめてくれたのも確か去年のお花見の席であった。長く深い交友のあった赤座夫妻に思ひ出を書いていただけた。多謝。

三月も二十日を過ぎた頃、八田木枯さんの娘さんから電話をいただいた。思ひもかけぬ木枯さんの訃報である。電話のあった前日、木枯さんに手紙を投函したがまだ着いてゐないはづ。発表は数日後なのでおねがひしますと夕刈さんにいはれた。

木枯さんとはよくお花見をした。杉並の真盛寺のしだれ櫻の下でみんなで記念撮影をしたのも懐かしい。一昨年は東京大学医科学研究所。厳めしい名前だがそこではゆっくりと花を堪能した。ベンチに腰掛け持参の名店の弁当で一杯やった。にぎやかしに花鳥も来くれた。その頃はまだ少し飲んでいただけた。今月の私の作品はその折にメモしたものを纏めた。

今年の花見はだうしやうか。

（喜孝）

前月正誤

21頁14行　寒灯廃棄→関東は粋

二〇一二年四月号

発行日　四月八日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　6908　6038

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。